

# 部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響

— 部活動のタイプ・積極性に注目して —

岡田 有 司\*

本研究の目的は、運動部と文化部を区分して捉え、部活動への積極性に注目しながら、(1) 部活動への参加が学校生活の諸領域、学校への心理社会的適応とポジティブな関係にあるのか、(2) 対人関係領域の心理社会的適応への影響が部活動への参加状況によって異なるのか、について検討することであった。質問紙調査によって得られた中学生 894 名のデータから、以下のことが明らかになった。まず、部活動に積極的な生徒は全体的に部活動に所属していない生徒に比べ、学校生活の諸領域や心理的適応の得点が高くなっていた。一方で、部活動に積極的でない生徒は全体的に学校生活の諸領域や心理的適応の得点が無所属の生徒よりも高いという結果は得られなかった。また、運動部の生徒は反社会的傾向が高いことが明らかになった。対人関係領域が心理社会的適応に与える影響については、「クラスへの意識」「他学年との関係」に関しては部活動の参加状況によって影響の仕方に違いがなかったが、「友人関係」「教師との関係」について違いがみられた。これらの知見をもとに、学校生活における部活動のポジティブ・ネガティブな面について議論がなされた。

キーワード：部活動, 積極性, 心理社会的適応, 中学生

## 問題と目的

正課のカリキュラムから解放される放課後は、生徒に自己裁量で時間を使う機会をもたらす。先行研究ではこうした自己裁量の時間の活動について、「構造化された活動」と「構造化されていない活動」が区別され、両者が子どもに与える影響について検討がなされてきた (Caldwell & Darling, 1999; Eccles & Barber, 1999; Mahoney & Stattin, 2000; McHale, Crouter, & Tucker, 2001; Shaw, Kleiber, & Caldwell, 1995)。Mahoney & Stattin (2000) によれば、構造化された活動には、定期的に参加し、一定のルールや大人による導きがあり、スキルの向上を目指し、積極的な注意の持続が必要で、明確なフィードバックがあるといった特徴があるとされ、これまでに構造化された活動への参加が子どもにポジティブな影響を与えることが示されている (Caldwell & Darling, 1999; Eccles & Barber, 1999; Mahoney & Stattin, 2000; McHale et al., 2001)。

こうした自己裁量で時間を使える放課後において、中学校では生徒が自由に選択可能な活動である部活動に多くの生徒が参加しており (88.50%; ベネッセ教育研究所, 1998), 教育実践における部活動の重要性が指摘されている (角谷 2005; 角谷・無藤, 2001)。そして、部活動は

多くの場合顧問の教師が活動を管理・運営し、一定の目的にむけて定期的に活動していることから、上述の構造化された活動と捉えることができ、部活動への参加は生徒の学校生活にポジティブな影響を与えていると考えられる。実際に、先行研究では部活動への参加が、学業成績や意欲 (Darling, Caldwell, & Smith, 2005; Eccles & Barber, 1999; 山口・岡本・中山, 2004), 教師への態度 (山口他, 2004) といった学校生活の諸領域にプラスの影響を与えているだけでなく、学校全体に対するポジティブな意識 (Darling et al., 2005; Eccles & Barber, 1999; 角谷・無藤, 2001; 山口他, 2004; 吉村, 1997) や逸脱行動の少なさ (Mahoney & Cairns, 1997) にもつながることが示されている<sup>1</sup>。

上述のように、一般的には部活動への参加が生徒の学校生活にポジティブな影響を与えることが示されているが、学校には様々な部活動が存在しており、先行研究では運動系の活動と非運動系の活動を区分した検討がなされている (Darling et al., 2005; 松原, 1990; Shaw

<sup>1</sup> 欧米では日本の部活動に相当する活動は課外活動 (extracurricular activity) とされるが (角谷・無藤, 2001), 本研究では「部活動」に表現を統一した。また、角谷・無藤 (2001) が指摘しているように、欧米の課外活動と国内の部活動を単純に並列的なものとして捉えることは適当ではないと考えられるが、両者ともに生徒が自己選択可能な構造化された活動という点で共通の特徴を有していることから、本研究では両者を関連付けながら検討を行った。

\* 中央大学大学院文学研究科  
yuji-okada@mail.goo.ne.jp

et al., 1995)。運動系の活動は、身体的・精神的な挑戦をもたらすだけでなく、コンピテンスの向上やその集団への同一視によりアイデンティティ形成が促進されることから、発達により影響があるとされている (Shaw et al., 1995)。そして、例えば竹村・前原・小林 (2007) では、運動部への参加が学業の目標志向性や適応にポジティブな影響を与えていることが示されている。一方で、運動系の活動には競争志向的、勝者・敗者がはっきりしているなどの特徴があるとされ (Barnett, 2007 ; Larson, 1994), 勝利至上主義や激しい練習など、ゆきすぎると発達にネガティブな影響を与える可能性も指摘されている (森川・遠藤, 1999)。この問題に関して、先行研究では運動系の活動に参加する生徒は学校での逸脱傾向が高いことが示されている (Lamborn, Brown, Mounts, & Steinberg, 1992)。非運動系の活動についてみると、Shaw et al. (1995) は、音楽や趣味活動などの非運動系の活動であっても、それが挑戦をもたらし、努力が必要な活動であれば、ポジティブな影響を与えることを指摘している。実際に、Darling et al. (2005) では学業成績や意欲、学校生活への態度について、運動系と非運動系では、非運動系の生徒の方が得点が高いという結果が得られており、また、Larson (1994) では、非運動系の活動への参加が逸脱傾向の低さにつながることを示されている。以上のことから、運動系の活動は非運動系の活動とは異なる特徴があると考えられるが、非運動系の活動と比べて必ずしもポジティブな影響があるとはいえず、一概に優劣を判断することはできない。そして、この問題については、こうした活動のタイプを区分した研究が十分に蓄積されていない (Shaw et al., 1995) ことから、本研究では両者を区分して検討を行う。その際に、男子の方が運動系の活動への参加率は高いことが示されており (Darling et al., 2005), こうした男女比の違いが学校生活の様々な指標の違いに表れている可能性があることから、性別についても考慮する。なお、以下では便宜的に運動系の活動を運動部、非運動系の活動を文化部と呼称する。

また、上述のような問題が生じていることを踏まえると、その背景には部活動のタイプ以外の要因が関係している可能性がある。先述したように部活動には多くの生徒が参加しているが、必ずしも全ての生徒が積極的に参加しているとは限らない。例えば、ベネッセ未来教育センター (2004) の調査では、運動部と文化部をあわせると 20.7% の生徒が部活動に参加しているもののあまり熱心ではないと回答している。また、角谷・無藤 (2001) は、部活動への単純な参加・不参加だ

けでなく、部活動へのコミットメントを考慮する必要性を指摘しており、角谷 (2005) は部活動での積極性の高さがその後の学校生活への満足を高めることを示している。このことを踏まえると、部活動に消極的な生徒にとっては、部活動がポジティブな学校生活につながっていない可能性もある。しかし、この問題については十分に検討されてこなかった。以上のことから、本研究では部活動のタイプだけでなく、部活動への積極性についても焦点を当て、部活動への参加がポジティブな学校生活につながっているのかについて検討する。

これまで部活動への参加が学校への適応に影響することを述べてきたが、先行研究では部活動における対人関係が重視されており、部活動への参加と適応の関連は対人関係に媒介されることが指摘されている (Darling et al., 2005 ; Eccles & Barber, 1999 ; Mahoney & Stattin, 2000)。そして、部活動では同じ目標や興味を共有し共に時間を過ごすことで、メンバー同士が友人関係に発展しやすく (Eccles & Barber, 1999 ; Larson, 1994), 参加する部活動によって異なる友人関係が形成されることが示されている (Eccles & Barber, 1999)。このことを考えると、部活動に参加している生徒は参加していない生徒と異なり、部活動を中心とした友人関係を形成しやすいと考えられる。また、Darling et al. (2005) は、部活動で要求される認知的な能力やソーシャルスキルが、クラスの文脈にもよい影響を与える可能性があることを指摘している。そのため、部活動に参加している生徒はクラスにおいても周囲と良好な関係を築きやすいと考えられる。他学年の生徒について考えてみると、通常のカリキュラムにおいて生徒は他学年の生徒と協同して活動する機会は少ない。しかし、部活動には異なる学年の生徒が一緒に参加しており、例えば吉村 (1997, 2005) は主将との関係が部活動への適応に重要になることを示している。そのため、部活動に参加している生徒は他学年の生徒との関係が強く、また重要なものになりやすい可能性がある。教師との関係についてみると、山口他 (2004) では、部活動への参加が教師への態度とポジティブに関連していることが示されており、その理由として、部活動参加者は教師とのコミュニケーション頻度が多く心理的距離が近づきやすいことが挙げられている。このことは、部活動に参加する生徒としていない生徒で教師との関係の違いを生じさせると考えられる。先行研究では対人関係領域が学校への適応を規定する重要な要因であることが示されているが (岡田, 2008), 上記のように部活動への

参加状況により対人関係が異なることを踏まえると、適応に対する影響の仕方も異なると予想される。しかし、この問題については十分に検討されていない。そこで、本研究では対人関係領域として上述した友人・クラス・他学年・教師の4領域を取り上げ、部活動への参加状況によって、対人関係領域の学校適応への影響がどのように異なるのかを探索的に検討する。

最後に本研究における学校適応の捉え方について述べる。まず、適応には個人の内的環境における調和である心理的適応と、外的環境における調和である社会的適応の2側面があると考えられることから、両側面を区別して捉える。そして、生徒が心理的に学校に適応するためには、学校環境からの要請に応え安定した学校生活を過ごせていると感じられることの他に、その環境を楽しんでいる必要があると考えられる。そのため、本研究では安定した学校生活を過ごせているかについての意識を学校生活への順応感（以下、順応感）、学校生活を楽しく過ごせているかの意識を学校生活の享受感（以下、享受感）として区別し（岡田, 2008）、両側面から学校への心理的適応を捉える。また、生徒が社会的に適応するためには、周囲に対して被害を加えないことの他に、周囲との関係を築き孤立しないことが重要になると考えられる。そのため、本研究では反社会的傾向と孤立傾向の2側面から社会的適応を捉える。

以上のことから、本研究では以下の2つを目的として研究を行う。まず、運動部と文化部を区分して捉え、部活動への積極性に注目しながら、(1)部活動への参加が学校生活の諸領域、学校への心理社会的適応とポジティブな関係にあるのかについて明らかにする。その上で、(2)部活動への参加状況によって、対人関係領域の心理社会的適応への影響がどのように異なるのかを探索的に検討する。

## 方 法

### 調査協力者・時期

2004年8月-2006年7月に愛知県（A校）・東京都（B・C・D・E・F校）の公立中学校6校で授業中に一斉形式で質問紙調査を実施した。960名分の質問紙を回収し、そのうち回答に不備のなかった中学1・2年生894名分のデータを分析に用いた（運動部男子362名、女子263名；文化部男子37名、女子148名；無所属男子44名、女子40名）。社会的適応に関する尺度はこの内271名（運動部男子108名、女子68名；文化部男子18名、女子58名；無所属男子9名、女子10名）に対して実施された<sup>2</sup>。

本研究における全体の部活動参加率は90.60%で、

ベネッセ教育研究所（1998）の調査（88.50%）とほぼ同様の参加率であった。各学校の部活動参加率は高い順に、A校=100%、B校=97.70%、C校=93.00%、D校=87.00%、E校=83.80%、F校=73.40%となっており、F校の参加率がやや低くなっていたが著しく参加率の低い学校はなかった。

### 質問紙の構成

**部活動への所属** 部活動に所属しているか否か、また、所属している場合は部活動の名称を書くよう求めた<sup>3</sup>。

**学校生活の諸領域との関係のよさ**<sup>4</sup> 浅川・尾崎・古川（2003）、河村（1999）の質問項目を参考に岡田（2008）が作成した、学校生活の下位領域に対する意識尺度を用いた。この尺度は学校生活の諸領域について尋ねており、それぞれの領域と生徒がポジティブな関係にあるかどうかを測定できる。本研究では学校生活の諸領域との関係を測定するため、「友人への意識」、「クラスへの意識」、「教師への意識」、「他学年への意識」、「進路への意識」、「学業への意識」、「校則への意識」の7つの下位尺度を用いた。その際に、本研究では生徒の負担を考慮し、岡田（2008）で各因子において因子負荷の高かった上位4項目（計28項目）を用いた。回答は「とてもあてはまる-まったくあてはまらない」の4件法で求めた。

**部活動への積極性**<sup>5</sup> 部活動への積極性を測定するため、上述の学校生活の下位領域に対する意識尺度（岡田, 2008）の下位尺度である「部活動への意識」を用いた。その際に、生徒の負担を考慮し、岡田（2008）で因子負荷の高かった上位4項目を用いた。これらの項目に対しては、部活動に参加している生徒にのみ回答してもらった。回答は「とてもあてはまる-まったくあてはまらない」の4件法で求めた。

**学校への心理的適応** 順応感の指標として包括的學校適応感尺度（岡田, 2006；項目例、「学校の中で自分は受け入

<sup>2</sup> 社会的適応に関する尺度は反社会的傾向や孤立傾向の経験を尋ねるなどネガティブな意味の項目で構成されていた。事前に各中学校の管理職に見てもらったところ、生徒への配慮という観点から実施することが難しいという学校があったため、了承を得た学校でのみ実施することとなった。

<sup>3</sup> 部活動の名称に基づき、「野球」「サッカー」「バスケットボール」「ソフトボール」「バレーボール」「ハンドボール」「テニス」「卓球」「バドミントン」「陸上」「柔道」「剣道」「水泳」「ダンス」を運動部に含めた。文化部には「吹奏楽」「音楽」「美術」「芸術」「コンピューター」「演劇」「園芸」「家庭科」「漫画」「絵本」「外国語」が含まれた。

<sup>4</sup> 質問項目の詳細は Appendix に記した。

<sup>5</sup> 質問項目の詳細は Appendix に記した。

れられていると思う」「自分は学校になじめていると思う」, 享受感の指標として学校享受感尺度(古市・玉木, 1994; 項目例, 「私は学校に行くのが好きだ」「学校では楽しいことがたくさんある」)を用いた。回答は「とてもそう思うーぜんぜんそう思わない」の4件法で求めた。

**学校への社会的適応** 反社会的傾向の指標として学校への不適応傾向尺度(酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村, 2002)の下位尺度である反社会的傾向の6項目を用いた(項目例, 「先生に反抗したり乱暴したことがある」「授業中大声を出したりしてさわいだことがある」)。孤立傾向の指標としては, いじめ被害・学級不適応児童発見尺度(河村・田上, 1997)の下位尺度である被侵害尺度の6項目を一部修正して用いた(項目例, 「クラスの人たちからムシされているようなことがある」「休み時間などに一人ぼっちでいることがある」)。回答は「よくあるーまったくない」の4件法で求めた。

## 結 果

### 尺度の構成

まず, 学校生活の7つの領域に対する意識について因子分析を行った。因子数を7に設定し, 因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行ったところ, 岡田(2008)と同様の7つの因子が得られ, 項目の内容から「友人関係( $\alpha=.80$ )」「クラスへの意識( $\alpha=.79$ )」「他学年との関係( $\alpha=.92$ )」「教師との関係( $\alpha=.85$ )」「学業への意欲( $\alpha=.76$ )」「進路意識( $\alpha=.80$ )」「校則への意識( $\alpha=.74$ )」と命名した。 $\alpha$ 係数は.74-.92となっており, 内的一貫性が確認された。

次に, 部活動に対する意識に関する項目に対して主成分分析を行ったところ単因子構造であることが確認され, 項目の内容から「部活動への傾倒」と命名した。 $\alpha$ 係数は.86であり, 内的一貫性が確認された。

心理社会的適応の指標について $\alpha$ 係数を求めたところ, 「順応感=.91」, 「享受感=.90」, 「反社会的傾向=.83」, 「孤立傾向=.84」であり, 内的一貫性が確認された。

### 部活動への参加と積極性による群分け

まず, 性別によって部活動への所属状況に違いがあるのかを検討した(Table 1)。 $\chi^2$ 分析を行ったところ有意差が認められ( $\chi^2(2)=82.41, p<.001$ ), 残差分析から運動部では男子が多く( $z=7.63, p<.01$ ) 女子は少ない( $z=-7.63, p<.01$ ) こと, 文化部では男子が少なく( $z=-9.03, p<.01$ ) 女子が多い( $z=9.03, p<.01$ ) ことが示された。無所属では男女に差はなかった。

次に, 「部活動への傾倒」得点に基づき, 運動部・文

**Table 1** 性別・部活動への所属状況によるクロス集計

	運動部(%)	文化部(%)	無所属(%)	計(%)
男子	362 (81.72)	37 (8.35)	44 (9.93)	443(100.00)
女子	263 (58.31)	148 (32.82)	40 (8.87)	451(100.00)
計	625 (69.91)	185 (20.69)	84 (9.40)	894(100.00)

化部に所属する生徒を平均値( $M=3.35$ )を基準にそれぞれ上位群と下位群に分けた<sup>6</sup>。上位群と下位群の得点に対して  $t$  検定を行った結果, 有意な差が示された ( $t(808)=39.07, p<.001$ )。これにより, 「運動部積極群(男子205名, 女子158名)」, 「運動部消極群(男子157名, 女子105名)」, 「文化部積極群(男子18名, 女子87名)」, 「文化部消極群(男子19名, 女子61名)」, 「無所属群(男子44名, 女子40名)」の5群に生徒を分類した。

### 部活動への参加と学校生活の諸領域との関係

上述の5つの群によって学校生活の諸領域での得点が異なるのかを検討するため, 性別(男女)×所属(5群)の2要因の分散分析を実施した。その結果, 全ての領域で所属の主効果が見られたため Tukey の HSD 法による多重比較を行った (Table 2)。

分析の結果, 「友人関係」については, 運動部積極群・文化部積極群がその他の群 ( $p<.001$ ) よりも得点が高かった。「クラスへの意識」については性の主効果も見られ, 女子の得点が男子よりも高かった。5群の比較については, 運動部積極群が運動部消極群 ( $p<.001$ )・文化部消極群 ( $p<.001$ )・無所属群 ( $p<.01$ ) よりも得点が高く, また, 文化部積極群は運動部消極群 ( $p<.01$ )・文化部消極群 ( $p<.05$ ) よりも得点の低いことが示された。「他学年との関係」については交互作用が認められたことから単純主効果検定を行った結果, 男子では運動部積極群がそれ以外の群 ( $p<.001$ ) よりも得点が高く, また, 運動部消極群は文化部消極群 ( $p<.05$ )・無所属群 ( $p<.01$ ) よりも得点の低いことが明らかになった。女子については, 運動部積極群・文化部積極群がその他の群 ( $p<.001$ ) よりも得点が高く, また, 運動部消極群は無所属群 ( $p<.05$ ) よりも得点が高かった。「教師との関係」については運動部積極群・文化部積極群が運動部消極群・文化部消極群 ( $p<.001$ ) よりも得点が高く, また, 無所属は運動部消極群 ( $p<.01$ ) よりも得点の低いことが明らかになった。「学業への意欲」については文化部積極群が運動部消極群 ( $p<.001$ )・文化部消極群 ( $p<.01$ ) よりも得点が高く, また, 運動部積極群も運動部消極群 ( $p<.001$ ) よりも得点の低いことが示され

<sup>6</sup> 本研究では平均値と同値を示した生徒はおらず, 全ての生徒が上位群・下位群のいずれかに分類された。

Table 2 性別・群による学校生活の諸領域との関係の違い

n	運動部積極群		文化部積極群		運動部消極群		文化部消極群		無所属群		性	F 所属	性× 所属
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子			
友人関係	3.65	3.71	3.76	3.70	3.38	3.46	3.20	3.39	3.44	3.41	1.11	19.21***	0.71
SD	0.43	0.37	0.36	0.44	0.53	0.52	0.59	0.67	0.51	0.54			
クラスへの意識	3.03	3.22	2.86	3.13	2.78	2.91	2.63	2.82	2.85	2.88	7.69**	10.74***	0.41
SD	0.66	0.59	0.67	0.62	0.62	0.63	0.50	0.67	0.59	0.62			
他学年との関係	3.33	3.29	2.61	3.20	2.77	2.72	2.26	2.55	2.27	2.29	5.94*	54.83***	3.10*
SD	0.65	0.55	1.06	0.73	0.69	0.76	0.80	0.82	0.86	1.00			
教師との関係	2.88	2.95	3.08	2.96	2.45	2.61	2.68	2.46	2.81	2.81	0.15	14.24***	1.25
SD	0.74	0.63	0.76	0.64	0.72	0.72	0.70	0.69	0.65	0.70			
学業への意欲	2.95	2.94	3.29	3.04	2.69	2.76	2.86	2.73	2.89	2.81	2.13	9.04***	1.06
SD	0.64	0.59	0.61	0.60	0.61	0.54	0.44	0.60	0.66	0.56			
進路意識	2.89	2.89	3.06	2.98	2.43	2.71	2.59	2.75	2.77	2.86	1.82	8.56***	1.47
SD	0.81	0.72	0.78	0.74	0.77	0.73	0.75	0.68	0.66	0.80			
校則への意識	2.95	2.93	3.17	3.06	2.79	2.81	3.26	3.03	3.15	2.85	4.84*	6.07**	1.38
SD	0.66	0.55	0.80	0.67	0.65	0.60	0.49	0.59	0.67	0.69			

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$ 

た。「進路意識」については、運動部消極群に比べ運動部積極群 ( $p < .001$ )・文化部積極群 ( $p < .001$ )・無所属群 ( $p < .05$ ) の得点が高くなっていた。「校則への意識」については性の主効果も示され、男子の得点が女子よりも高かった。5群の比較では、運動部消極群に比べ運動部積極群 ( $p < .05$ )・文化部積極群 ( $p < .01$ )・文化部消極群 ( $p < .01$ ) の得点の高いことが示された。

以上のことから、全体的に運動部積極群・文化部積極群は各領域において得点が高くなっており、部活動に積極的に参加している生徒は学校生活の様々な側面においても良好な状態にあるといえる。一方、運動部消極群・文化部消極群については全体的に各領域の得点が無所属群よりも高いという結果は得られず、単に部活動に参加することが諸領域との関係のよさにつな

がるわけではないことが明らかになった。特に、運動部消極群は無所属群よりも教師との関係や進路意識の得点が低く、校則への意識も最も低くなっており、無所属群の生徒よりも学校生活に困難を抱えているといえる。

#### 部活動への参加と学校への心理社会的適応

5つの群によって学校への心理社会的適応がどのように異なるのかを検討するため、性別(男女)×所属(5群)の2要因の分散分析を実施した。なお、社会的適応(反社会的傾向・孤立傾向)についてはこれらの尺度を実施した271名のデータを用いて分析が行われた。その結果、全ての指標で有意差が検出されたため、TukeyのHSD法による多重比較を行った(Table 3)。

まず、「順応感」については運動部積極群、文化部積

Table 3 性別・群による心理社会的適応の違い

n	運動部積極群		文化部積極群		運動部消極群		文化部消極群		無所属群		性	F 所属	性× 所属
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子			
順応感	3.16	3.12	3.08	3.19	2.72	2.79	2.64	2.76	2.84	2.77	0.47	21.87***	0.60
SD	0.59	0.52	0.61	0.60	0.65	0.58	0.58	0.58	0.53	0.63			
享受感	2.89	2.99	2.51	3.05	2.45	2.68	2.58	2.74	2.77	2.70	10.16**	12.82***	2.27
SD	0.65	0.59	0.84	0.68	0.60	0.69	0.52	0.70	0.59	0.82			
n	72	48	12	45	36	20	6	13	9	10			
孤立傾向	1.56	1.31	1.38	1.39	1.76	1.53	2.19	1.51	2.02	1.45	12.21**	3.61**	1.34
SD	0.65	0.49	0.29	0.44	0.76	0.61	0.70	0.41	1.03	0.50			
反社会的傾向	1.35	1.15	1.07	1.10	1.42	1.13	1.11	1.08	1.07	1.03	2.89	2.75*	1.22
SD	0.58	0.26	0.09	0.20	0.52	0.17	0.27	0.11	0.12	0.07			

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

極群がその他の群 ( $p < .001$ ) に比べ得点の高いことが明らかになった。「享受感」については性の主効果も検出され、女子が男子よりも得点が高かった。5群の比較については、運動部積極群が運動部消極群 ( $p < .001$ )・文化部消極群 ( $p < .05$ ) よりも得点が高く、また、文化部積極群は運動部消極群 ( $p < .001$ ) よりも得点のことが示された。「孤立傾向」についても性の主効果が認められ、男子は女子よりも得点が高かった。一方、所属の主効果は有意であったが ( $p < .01$ )、多重比較では運動部消極群は文化部積極群よりも得点の高い傾向 ( $p < .07$ ) にあることが示されたものの、有意な差は検出されなかった。「反社会的傾向」については運動部積極群・運動部消極群が文化部積極群 ( $p < .05$ ) に比べ得点のことが明らかになった。

以上の結果から、運動部積極群、文化部積極群は全体的に学校への心理的適応がよいことが示された。一方で、運動部消極群・文化部消極群については無所属群よりも心理的適応がよいわけではなく、運動部消極群の享受感は相対的に最も低くなっていた。社会的適応に関しては、部活動に積極的かどうかにかかわらず、運動部に所属している生徒は反社会的傾向が高いことが示された。

#### 心理社会的適応に影響する対人関係領域の違い

5つの群によって、対人関係領域(「友人関係」「クラスへの意識」「他学年との関係」「教師との関係」)が心理社会的適応に与える影響が異なるのかを検討するため、多母集団同時分析を行った。心理的適応については894名分のデータ、社会的適応については271名分のデータを用い別々に分析を実施した。分析にはAmos 4.0を用い、最尤法によりパラメータの推定を行った。パス解析に用いた各変数の関連をTable 4に示した。

全ての群において有意(5%水準)でなかったパスを削除しモデルを修正した結果、最終的にFigure 1・2の結果が得られた。モデルの適合度は、心理的適応では

$\chi^2(10) = 10.67$  (*n.s.*), GFI=1.00, AGFI=.96, CFI=1.00, RMSEA=.01, 社会的適応では  $\chi^2(20) = 23.99$  (*n.s.*), GFI=.97, AGFI=.88, CFI=.96, RMSEA=.03であった。

以下では、対人関係領域の影響に注目して述べていく。まず心理的適応についてだが、「クラスへの意識」は全ての群において順応感、享受感に正のパスが引かれたが、「他学年との関係」については有意なパスは示されなかった。「友人関係」では、全ての群で順応感に正の影響がみられたが、享受感については運動部積極群 ( $\beta = .10$ ) と無所属群 ( $\beta = .31$ ) の影響のみが示された。享受感に対する運動部消極群と文化部消極群のパス係数はともに  $\beta = .12$  となっており、運動部積極群のパス係数よりも高かったが、有意ではなかった。そこで、有意となったパス係数と有意でなかったパス係数に差があるのかを、検定統計量により検討したところ、無所属群のパス係数は運動部消極群 ( $z = 2.43, p < .05$ )・文化部消極群 ( $z = 1.90, p < .10$ ) のパス係数よりも高くなっていたが、運動部積極群のパス係数は有意でなかったパス係数と差がなかった。「教師との関係」に関しては、順応感では文化部積極群 ( $\beta = .17$ ) と運動部消極群 ( $\beta = .18$ ) の影響がみられた。しかし、上述と同様の手続きで検定統計量を確認した結果、有意なパス係数と有意でないパス係数との間に差は認められなかった。享受感に対しては、運動部積極群 ( $\beta = .28$ ) と運動部消極群 ( $\beta = .16$ ) の影響が示された。検定統計量の検討からは、運動部積極群のパス係数は文化部積極群 ( $z = -2.02, p < .05$ )・文化部消極群 ( $z = -1.74, p < .10$ ) のパス係数よりも高かったが、運動部消極群のパス係数は有意でなかったパス係数と差はなかった。

次に、社会的適応についてだが、「クラスへの意識」「他学年との関係」については有意なパスは引かれなかった。「友人関係」については、運動部積極群 ( $\beta = -.47$ )・文化部積極群 ( $\beta = -.54$ )・無所属群 ( $\beta = -.60$ ) にお

Table 4 各変数間の相関<sup>a)</sup>

	1	2	3	4	5	6	7	8
1 友人関係	-	.45***	.33***	.30***	.50***	.40***	-	-
2 クラスへの意識	.52***	-	.31***	.39***	.58***	.59***	-	-
3 他学年との関係	.39***	.44***	-	.22***	.36***	.28***	-	-
4 教師との関係	.28***	.39***	.25***	-	.39***	.42***	-	-
5 順応感	.58***	.58***	.43***	.33***	-	.60***	-	-
6 享受感	.48***	.61***	.38***	.45***	.59***	-	-	-
7 孤立傾向	-.44***	-.29***	-.17**	-.11	-.43***	-.35***	-	-
8 反社会的傾向	.04	.01	.09	-.14*	-.02	-.09	.18**	-

a) 上段: 894名の変数間の相関, 下段: 271名の変数間の相関

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

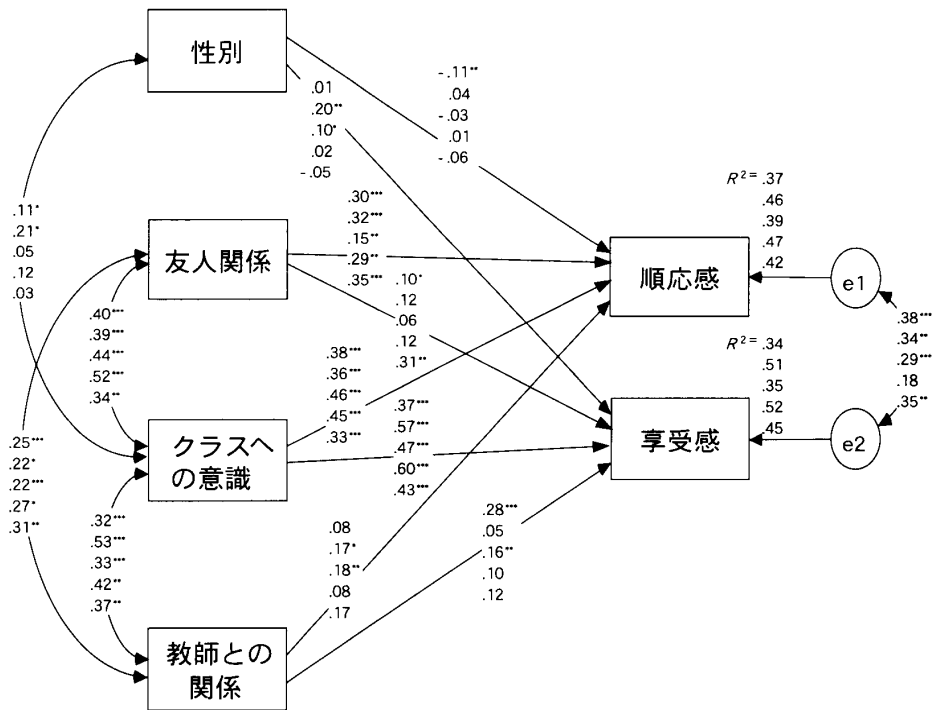


Figure 1 5つの群における対人関係領域の心理的適応への影響<sup>a)b)c)</sup>

- a) 1 段目 = 運動部積極群 (n=363), 2 段目 = 文化部積極群 (n=105), 3 段目 = 運動部消極群 (n=262), 4 段目 = 文化部消極群 (n=80), 5 段目 = 無所属群 (n=84)
- b) 性別についてはダミー変数を用いた (男子=0, 女子=1)
- c) \*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

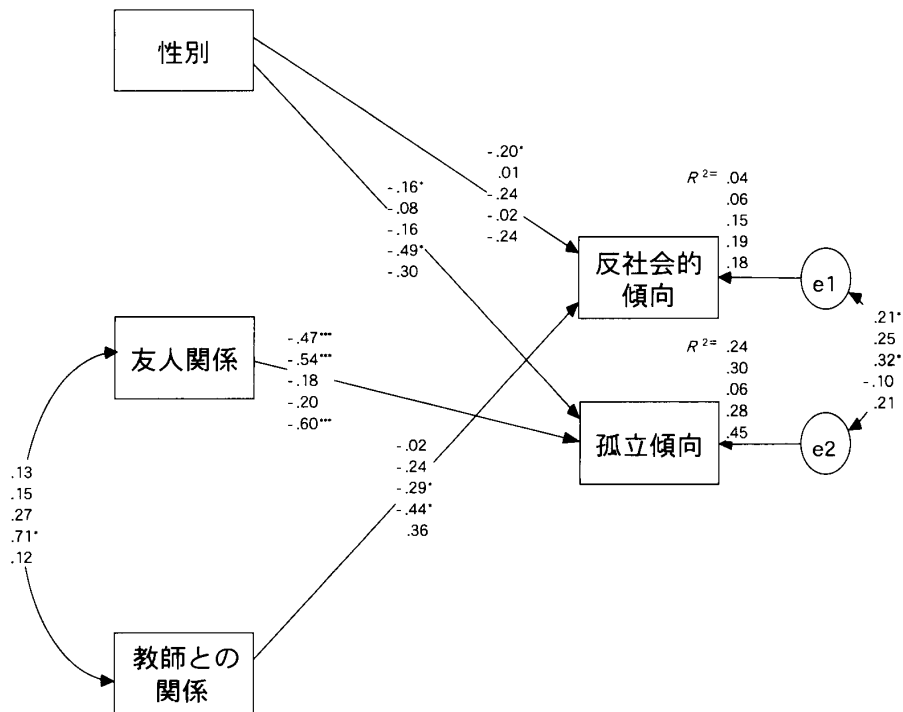


Figure 2 5つの群における対人関係領域の社会的適応への影響<sup>a)b)c)</sup>

- a) 1 段目 = 運動部積極群 (n=120), 2 段目 = 文化部積極群 (n=57), 3 段目 = 運動部消極群 (n=56), 4 段目 = 文化部消極群 (n=19), 5 段目 = 無所属群 (n=19)
- b) 性別についてはダミー変数を用いた (男子=0, 女子=1)
- c) \*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

いて孤立傾向への影響が示された。検定統計量を確認したところ、無所属群のパス係数は文化部消極群 ( $z = -2.43, p < .05$ )・運動部消極群 ( $z = -1.80, p < .10$ ) のパス係数よりも高く、運動部積極群 ( $z = 2.50, p < .05$ ) と文化部積極群 ( $z = 1.98, p < .05$ ) のパス係数は文化部消極群のパス係数よりも高かった。「教師との関係」については、運動部消極群 ( $\beta = -.29$ ) と文化部消極群 ( $\beta = -.44$ ) において反社会的傾向への影響が示された。検定統計量をみると、運動部消極群のパス係数は無所属群 ( $z = 2.99, p < .01$ )・運動部積極群 ( $z = -1.70, p < .10$ ) のパス係数よりも高く、文化部消極群のパス係数は無所属群 ( $z = 2.69, p < .01$ ) のパス係数よりも高かった。

以上の結果から、心理的適応・社会的適応ともに「友人関係」「教師との関係」については群によって影響の仕方に違いのあることが明らかになった。そして、検定統計量の検討より、心理的適応については、無所属群において「友人関係」が享受感に影響していたこと、運動部積極群において「教師との関係」が享受感に影響していることが示された。社会的適応については、運動部積極群・文化部積極群・無所属群では「友人関係」が孤立傾向に影響し、運動部消極群・文化部消極群では「教師との関係」が反社会的傾向に影響していることが示された。

## 考 察

### 部活動への参加と学校生活の諸領域・心理社会的適応の関係について

本研究の第1の目的は、運動部と文化部を区分して捉え、部活動への積極性に注目しながら、部活動への参加が学校生活の諸領域や学校への心理社会的適応とポジティブな関係にあるのかについて検討することであった。

まず、部活動に積極的な生徒についてみると、学校生活の諸領域に関して、先行研究では部活動への参加が、学業成績や意欲 (Darling et al., 2005; Eccles & Barber, 1999; 山口他, 2004)、教師への態度 (山口他, 2004) とポジティブな関係にあることが示されているが、本研究ではこうした関係は部活動に積極的な生徒のみにみられるという結果が得られた。また、本研究では友人・クラス・他学年・進路・校則といったその他の領域においても部活動に積極的な生徒の得点が高くなっていた。心理的適応についてみると、先行研究では部活動への参加が学校全体に対するポジティブな意識につながることを示されているが (Darling et al., 2005; Eccles & Barber, 1999; 角谷・無藤, 2001; 山口他, 2004; 吉村,

1997)、こうした関係についても、部活動に積極的な生徒のみに見られるという結果が得られた。以上のことから、部活動に積極的に参加している生徒は学校生活の様々な領域で良好な状態にあるだけでなく、心理的適応も高いといえ、彼らにとっては部活動が学校生活の重要な支えとして機能していると考えられる。角谷・無藤 (2001) は、教育実践において部活動の意義の大きさが認識されているにもかかわらず、そのことが先行研究で見出されてこなかったと指摘しており、その要因として部活動へのコミットメントが考慮されてこなかったことを挙げている。本研究では部活動への積極性を考慮して分析を行ったが、こうした分析を行うことで部活動に積極的な生徒にとって部活動の持つ意義は大きいことが示されたといえよう。

部活動に消極的な生徒についてみると、こうした生徒は全体的に各領域の得点が部活動に参加していない生徒よりも高いわけではなかった。また、心理的適応に関しても部活動に消極的な生徒が部活動に参加していない生徒よりもよいという結果は得られなかった。これらの知見を踏まえると、部活動は生徒の発達や適応を促進するといった教育効果を目的に実践されてきた (山口他, 2004) が、単に部活動に参加することが必ずしもポジティブな教育効果につながっているわけではないことが示されたといえるだろう。また、特に運動部で消極的な生徒の場合、部活動に参加していない生徒よりも得点の低い学校生活の領域があったり、享受感が低くなっていることが示された。このことは、場合によっては部活動が生徒にネガティブな影響を与える場合のあることを示唆している。都筑 (2001) は、小学6年生が中学校生活で期待するものとして最も多いのが部活動であることを示している。部活動への参加は学校への心理的な結びつきを強める (Darling et al., 2005) 可能性がある一方で、期待が大きすぎに、部活動でうまくいかない生徒は中学校生活に失望し、学校生活への意欲が低下してしまう場合があると考えられる。また、スポーツ活動には競争志向的、勝者・敗者がはっきりしているなどの特徴があるとされ (Barnett, 2007; Larson, 1994)、勝利至上主義や激しい練習など、ゆきすぎると発達にネガティブな影響を与える可能性が指摘されている (森川・遠藤, 1999)。本研究の運動部で消極的であった生徒には、こうしたネガティブな影響が表れていると推察される。

運動部の生徒についてみると、部活動に積極的であるか否かにかかわらず、運動部への参加が反社会的傾向の高さにつながっているという知見が得られた。

本研究では運動部と文化部を区分して検討したが、ここからは、活動内容によって社会的適応への影響の仕方は異なることが示されたといえよう。そして、先行研究では運動部への参加が学校での逸脱傾向(Lamborn et al., 1992)と関係していることが示されているが、本研究でも同様の知見が得られた。多くの先行研究では部活動のポジティブな影響について検討されており、ネガティブな影響について検討した研究は少ないが、本研究の知見には部活動のネガティブな面が表れているといえるだろう。運動部への参加が反社会的傾向と関連していた背景には次のような可能性が考えられる。一般的に運動部の生徒は文化部の生徒に比べ身体的なコンピテンスが高くなると考えられる。Loeber & Hay (1997)では中学生の時期は身体的な殴り合いが増加することが示されているが、身体能力への自信の高さが反社会的行動につながりやすいという可能性があるだろう。また、梶原・武良・松田(2001)は、パーソナリティの5因子モデルに基づきアスリートと非アスリートの学生の違いについて検討しており、アスリートは非アスリートに比べ外向性・誠実性が高い反面、調和性・開放性の低いことを示している。このことを踏まえると、運動部を選択した生徒とそうでない生徒ではパーソナリティに違いがあり、そのことが反社会的傾向の高さと関係している可能性もある。

#### 心理社会的適応に影響する対人関係領域の違いについて

本研究の第2の目的は、部活動への参加状況によって対人関係領域の心理社会的適応への影響がどのように異なるのかを探索的に検討することであった。分析の結果、「クラスへの意識」「他学年との関係」に関しては、5つの群によって心理社会的適応への影響の仕方に違いはなかったが、「友人関係」「教師との関係」については違いがみられた。そのため、部活動の参加・積極性により、対人関係領域と心理社会的適応との関連は異なることが示された。以下では、違いのみられた「友人関係」「教師との関係」に注目して考察する。

まず、友人関係についてだが、運動部積極群・文化部積極群・無所属群は友人関係のよさが孤立傾向の低さにつながっており、無所属群では享受感の高さにもつながることが示された。孤立傾向への影響に関しては、部活動に積極的な生徒と無所属の生徒で共通していたが、両者において学校生活での友人関係が持つ意味は異なると考えられる。先行研究では、部活動で同じ目標や興味を共有し共に時間を過ごすことで、メンバー同士が友人関係に発展しやすいことが指摘されて

いる(Eccles & Barber, 1999; Larson, 1994)。また、角谷・無藤(2001)は部活動がアイデンティティを形成する際の重要な準拠集団になりうると述べている。これらのことを考慮すると、部活動に所属している生徒は部活動内で友人関係を形成しやすく、部活動に基づいた人間関係を重視しやすい傾向にあるといえる。そして、部活動に積極的な生徒ほどこうした傾向が強く、部活動を中心とした友人関係を築きやすいと予想されることから、そこで関係が悪化した場合に学校内での孤立につながりやすいのだと考えられる。一方、部活動に所属していない少数派の生徒については友人関係形成の場が少なく、更に、部活動を中心とした人間関係を形成している生徒とは関係が深まりにくい可能性がある。このように、無所属の生徒は交友関係が狭くなりやすいため、その状況の中で友人を獲得し関係を築けなければ孤立するリスクが高まるといえるだろう。そして、他の生徒のように部活動にやりがいを見出すことができないぶん、学校生活の享受において友人との関係が重要になるのだと考えられる。ただ、無所属の生徒には初めから部活動に所属していない生徒、途中でやめた生徒、学外の活動に参加している生徒など、様々な生徒が含まれている可能性があり、無所属群における対人関係領域と心理社会的適応の関連については、更なる検討が必要だといえよう。

次に、教師との関係については、運動部積極群では教師との関係のよいことが享受感の高さにつながることが示された。また、運動部消極群・文化部消極群では教師との関係のよさが反社会的傾向の低さにつながることが示された。運動部に積極的な生徒についてだが、松原(1990)は、団体成績を競う部活動においては、その成果が教師の力量によって左右されるところが大きいと指摘している。このことを考慮すると、運動部にはチームワークが必要とされ、勝敗を競う活動が多いことから、文化部に比べ教師の指導による統率が強いと考えられる。そして、部活動に積極的な生徒ほどこうした教師の影響力も強くなるため、教師との関係のよし悪しが学校生活の享受に影響するのだと考えられる。運動部消極群・文化部消極群については次のように考えられる。山口他(2004)では、部活動への参加が教師への態度とポジティブに関連していることが示されており、その理由として、部活動参加者は教師とのコミュニケーション頻度が多くなることを挙げられている。しかし、相互作用の機会が多いことは、両者の距離が近づくことで関係がよくなる反面、相互作用がうまくいかない場合、かえって関係を悪化させ

てしまう可能性もある。本研究の学校生活の諸領域に関する分析では、部活動に消極的な生徒は教師との関係がよくなく、特に運動部に消極的な生徒は無所属の生徒よりも得点の低いことが示されているが、ここにはこうした距離の近さによるネガティブな影響が現れていると考えられる。このことを踏まえると、部活動に消極的な生徒は教師に対してネガティブな態度を抱きやすく、教師への反感から反社会的な行動を起こす傾向にあると推察される。

### 実践への示唆と今後の課題

中学校では非常に多くの生徒が部活動に参加しており、教育実践においては部活動が生徒にポジティブな影響を与えるものとして捉えられていると考えられる。しかし、部活動への参加が場合によっては生徒にネガティブな影響を与える可能性もあるという本研究の知見を踏まえると、単に生徒を部活動に参加させようとするには問題があると考えられる。なかでも、運動部に消極的な生徒は困難を抱えやすいことが示されたが、部活動のあり方の見直しも含め、こうした生徒をいかにフォローしていくかが課題になるだろう。また、部活動に所属していない生徒にとっては友人の存在が他の生徒よりも心理社会的適応に重要である一方で、友人獲得の機会が少ないと考えられることから、こうした少数派の生徒に対する対応も必要だといえる。

今後の課題についてだが、本研究では横断データを用い、部活動への積極性に注目して生徒を区分し、心理社会的適応との関係について検討してきた。しかし、部活動に熱心な学校、そうでない学校があることを踏まえると、今後は積極性という個人の意識だけでなく、部活動の頻度や活動時間といった外的な指標も含めて検討する必要があるだろう。また、学校に適応的であるほど部活動にも積極的になるという本研究とは逆の因果も想定されるが、この問題については検討できず、今後は縦断データを用いた分析が望まれる。更に、本研究では対人関係領域に注目したが、学校生活全体における対人関係について尋ねており、部活動での対人関係が学校生活での対人関係とどのように関係しているのかについては明らかにできなかった。今後は、部活集団の規模なども考慮に入れ、部活動内の対人関係と適応との関係について直接検討できる研究が必要だといえる。

### 引用文献

浅川潔司・尾崎高弘・古川雅文 (2003). 中学校新入生の学校適応に関する学校心理学的研究 兵庫教

育大学研究紀要, 23, 81-88. (Asakawa, K., Ozaki, T., & Kogawa, M. (2003). A school psychological study of fresh students' adjustment to their junior high school. *Hyogo University of Teacher Education Journal*, 23, 81-88.)

Barnett, L. A. (2007). "Winners" and "losers": The effects of being allowed or denied entry into competitive extracurricular activities. *Journal of Leisure Research*, 39, 316-344.

ベネッセ教育研究所 (1998). 閉塞状況の中の生徒たち モノグラフ・中学生の世界 Vol. 59 ベネッセコーポレーション

ベネッセ未来教育センター (2004). 勉強する中学生・勉強しない中学生 モノグラフ・中学生の世界 Vol. 78 ベネッセコーポレーション

Caldwell, L. L., & Darling, N. (1999). Leisure context, parental control, and resistance to peer pressure as predictors of adolescent partying and substance use: An ecological perspective. *Journal of Leisure Research*, 31, 57-77.

Darling, N., Caldwell, L. L., & Smith, R. (2005). Participation in school-based extracurricular activities and adolescent adjustment. *Journal of Leisure Research*, 37, 51-76.

Eccles, J. S., & Barber, B. L. (1999). Student council, volunteering, basketball, or marching band: What kind of extracurricular involvement matters? *Journal of Adolescent Research*, 14, 10-43.

古市祐一・玉木弘之 (1994). 学校生活の楽しさとその規定要因 岡山大学教育学部研究集録, 96, 105-113. (Furuichi, Y., & Tamaki, H. (1994). Factors contributing to the enjoyment of junior high school life. *Bulletin of the Faculty of Education, Okayama University*, 96, 105-113.)

梶原 慶・武良徹文・松田 俊 (2001). アスリートおよび非アスリートのパーソナリティ: パーソナリティ5因子モデルによる探索的調査 スポーツ心理学研究, 28, 57-66. (Kajihara, K., Mura, T., & Matsuda, T. (2001). Personality of athletes and non-athletes: An exploratory investigation using the five-factor model of personality. *Japanese Journal of Sport Psychology*, 28, 57-66.)

河村茂雄 (1999). 楽しい学校生活を送るためのア

- ンケート Q-U (中学生用) 実施・解釈ハンドブック 図書文化
- 河村茂雄・田上不二夫 (1997). いじめ被害・学級不適応児童発見尺度の作成 カウンセリング研究, **30**, 112-120. (Kawamura, S., & Tagami, F. (1997). Development of a scale to detect bullying and isolation in class. *Japanese Journal of Counseling Science*, **30**, 112-120.)
- Lamborn, S. D., Brown, B. B., Mounts, N. S., & Steinberg, L. (1992). Putting school in perspective: The influence of family, peers, extracurricular participation, and part-time work on academic engagement. In F. M. Newmann (Ed.), *Student engagement and achievement in American secondary schools* (pp. 153-181). New York: Teachers College Press.
- Larson, R. (1994). Youth organizations, hobbies, and sports as developmental context. In R. K. Silbereisen & E. Todt (Eds.), *Adolescence in context: The interplay of family, school, peers, and work in adjustment* (pp. 46-65). New York: Springer-Verlag.
- Loeber, R., & Hay, D. (1997). Key issues in the development of aggression and violence from childhood to early adulthood. *Annual Review of Psychology*, **48**, 371-410.
- Mahoney, J. L., & Cairns, R. B. (1997). Do extracurricular activities protect against early school dropout? *Developmental Psychology*, **33**, 241-253.
- Mahoney, J. L., & Stattin, H. (2000). Leisure activities and adolescent antisocial behavior: The role of structure and social context. *Journal of Adolescence*, **23**, 113-127.
- 松原敏浩 (1990). 部活動における教師のリーダーシップ・スタイルの効果—中学校教師の視点からのアプローチ—教育心理学研究, **38**, 312-319. (Matsubara, T. (1990). Effectiveness of teacher's leadership style on club activities: A leadership study based on junior high school teacher's self-rating. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **38**, 312-319.)
- McHale, S. M., Crouter, A. C., & Tucker, C. J. (2001). Free-time activities in middle childhood: Links with adjustment in early adolescence. *Child Development*, **72**, 1764-1778.
- 森川貞夫・遠藤節昭 (1999). 必携スポーツ部活動ハンドブック 大修館書店
- 岡田有司 (2006). 該当カテゴリー—直接測定法による包括的學校適応感尺度の作成—性差・学年差の検討—大学院研究年報 (文学研究科篇 中央大学), **36**, 149-152. (Okada, Y. (2006). Development of Global School Adjustment Scale based on applicable category direct measurement method: Differences in gender and year of school. *Bulletin of Graduate Studies (Literature) Chuo University*, **36**, 149-152.)
- 岡田有司 (2008). 学校生活の下位領域に対する意識と中学校への心理的適応—順応することと享受することの違い—パーソナリティ研究, **16**, 388-395. (Okada, Y. (2008). Views concerning domains of school life and psychological adjustment in junior high school students: Distinguishing school adaptation and enjoyment of school life. *Japanese Journal of Personality*, **16**, 388-395.)
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 (2002). 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, **50**, 12-22. (Sakai, A., Sugawara, M., Maeshiro, K., Sugawara, K., & Kitamura, T. (2002). Parent-child relations of mutual trust, trust in one's best friend, and school adjustment: Junior high school students. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **50**, 12-22.)
- Shaw, M. S., Kleiber, D. A., & Caldwell, L. L. (1995). Leisure and identity formation in male and female adolescents: A preliminary examination. *Journal of Leisure Research*, **27**, 245-263.
- 角谷詩織 (2005). 部活動への取り組みが中学生の学校生活への満足感をどのように高めるか: 学業コンピテンスの影響を考慮した潜在成長曲線モデルから 発達心理学研究, **16**, 26-35. (Sumiya, S. (2005). Participation in extracurricular activities and students' satisfaction with junior high school: A latent growth curve model. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **16**, 26-35.)
- 角谷詩織・無藤 隆 (2001). 部活動継続者にとって

の中学校部活動の意義—充実感・学校生活への満足度との関わりにおいて— 心理学研究, **72**, 79-86. (Sumiya, S., & Muto, T. (2001). The significance of extracurricular activities in life of junior high school students. *Japanese Journal of Psychology*, **72**, 79-86.)

竹村明子・前原武子・小林 稔 (2007). 高校生におけるスポーツ系部活参加の有無と学業の達成目標および適応との関係 教育心理学研究, **55**, 1-10. (Takemura, A., Maehara, T., & Kobayashi, M. (2007). Participation in sports clubs and academic goal orientation and adjustment : High school students. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **55**, 1-10.)

都筑 学 (2001). 小学校から中学校への進学にともなう子どもの意識変化に関する短期縦断的研究 心理科学, **22**, 41-54. (Tsunami, M. (2001). A follow-up study on student's consciousness change during their transition from elementary school to junior high school. *Japanese Journal of Psychological Science*, **22**, 41-54.)

山口正二・岡本貴行・中山 洋 (2004). 高等学校における部活動への参加と学校適応度との関連性に関する研究 カウンセリング研究, **37**, 232-240. (Yamaguchi, S., Okamoto, T., & Nakayama, H. (2004). A study of the relationship between participation in school clubs and school adjustment to senior high school from the viewpoint of school type. *Japanese Journal of Counseling Science*, **37**, 232-240.)

吉村 斉 (1997). 学校適応における部活動とその人間関係のあり方—自己表現・主張の重要性— 教育心理学研究, **45**, 337-345. (Yoshimura, H. (1997). Human interaction in extracurricular athletic clubs in relation to school adjustment members : The importance of self-assertion. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **45**, 337-345.)

吉村 斉 (2005). 部活動への適応感に対する部員の対人行動と主将のリーダーシップの関係 教育心理学研究, **53**, 151-161. (Yoshimura, H. (2005). Adjustment to club activities : Club members' interpersonal behavior and team captains' leadership style. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **53**, 151-161.)

## 謝 辞

調査に協力していただいた中学校の先生方、生徒の皆さんに心より感謝申し上げます。また、本論文の作成にあたり指導していただきました都筑学先生(中央大学)、データの収集に協力していただきました加藤弘通先生(静岡大学)に深く感謝いたします。

## Appendix

### 学校生活の諸領域との関係のよさ

#### 「友人関係」

1. 自分は友だちとはうまくいっている
2. たよりにできる友だちがいる
3. 学校内には気軽に話せる友だちがいる
4. クラス内には色々な活動やおしゃべりに誘ってくれる友だちがいる

#### 「クラスへの意識」

1. クラスの中にいると、ほっとしたり、明るい気分になる
2. クラスで行事に参加したり、活動するのは楽しい
3. 自分もクラスの活動に貢献していると思う
4. 自分のクラスは仲のよいクラスだと思う

#### 「教師との関係」

1. 先生にしたしみを感じる
2. 学校内には気軽によく話をする先生がいる
3. 自分を認めてくれる先生がいる
4. 担任の先生とはうまくいっていると思う

#### 「他学年との関係」

1. 先輩いや後輩はいにしたしみを感じる
2. 自分は先輩いや後輩とはうまくいっている
3. 先輩いや後輩はと話していて楽しい
4. 先輩いや後輩はに受け入れられていると思う

#### 「進路意識」

1. 自分の進みたい職業の分野については自分から調べている
2. 私は自分にあった進路を考えている
3. 私は自分の将来や夢に希望を持っている
4. 進路について仲のよい友人などと話し合うことがある

#### 「学業への意欲」

1. 学校の勉強には自分から自主的に取り組んでいる
2. 勉強してよい成績をとろうと努力している
3. 学習内容をより理解するための、自分なりの学習の仕方がある

## 4. 授業の内容は理解できている

## 「校則への意識」

1. 学校の規則はやぶってもいいと思う
2. 校則はあったほうがいい
3. 校則はあまり気にならない
4. 学校の規則はちゃんと守っている

## 部活動への傾倒

1. 部活をやることにやりがいを感じる
2. 自分は部活でうまくいっている
3. 部活には自主的に参加している
4. 自分は部活の中で自分をだせていると思う

(2008.5.8 受稿, '09.5.18 受理)

*Participation in School-Based Extracurricular Activities and  
Junior High School Students' Psychosocial Adjustment to School :  
Effect of Type of Extracurricular Activity and Extent of Involvement*

YUJI OKADA (GRADUATE SCHOOL OF LITERATURE, CHUO UNIVERSITY)

JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2009, 57, 419-431

The present study focused on the effects of active involvement in athletic and non-athletic extracurricular activities (ECA). Junior high school students ( $N = 894$ ) completed a self-report questionnaire that aimed to discover (a) whether participation in extracurricular activities had a positive influence in each domain of school life and on psychosocial adjustment to school, and (b) whether the association between interpersonal domains and psychosocial adjustment differed, depending on the nature of students' participation in extracurricular activities. The results suggested that students with active involvement in extracurricular activities also had higher scores on each domain of school life and psychological adjustment, compared to students not involved in extracurricular activities, whereas the scores of students with low active involvement in extracurricular activities were not higher than non-participants' scores. It was also found that participants in athletic extracurricular activities had higher scores on antisocial tendencies. Analyses of the association between interpersonal domains and psychosocial adjustment suggested that how student-peer and student-teacher relations influenced psychosocial adjustment differed depending on the condition of participation in extracurricular activities. Students' views concerning their class and student-other grader relations were not involved in this association. The discussion dealt with positive and negative aspects of extracurricular activities.

Key Words : extracurricular activities, psychosocial adjustment, active involvement, athletic activities in school, junior high school students